

「ともいき懇話会」報告②

世界のグローバル化、情報過多、価値観の多様化、少子高齢化、過疎化、そして宗教心の希薄化等々、世界や日本の変化の中で、人々は生きる指針に迷い、心の支えとなるものを求めています。

こうした現状に対して、「(公財) 浄土宗ともいき財団」では、平成 27 年春に「ともいき懇話会」を設立、宗教学者・作家・報道関係者など 8 名の有識者の方々から、今日の社会問題に対する宗教者の役割について意見・提言をお聞きしています。

第 3 回「ともいき懇話会」報告書②

テーマ 「お寺でできる社会貢献」 ——特に寺院は介護問題に何ができるか——

日 時 平成 28 年 2 月 15 日 17 時～19 時半

今回のテーマは、第 2 回懇話会で D 氏から発言のあった介護問題について、「お寺でできる社会貢献、——特に寺院は介護問題に何ができるか——」について意見・提言をお聞きしました。

なお、文中の Y 氏は宗教学者でともいき懇話会の代表、O 師は浄土宗総合研究所研究員です。

各氏意見・提言

D 氏 昨年、妻の具合が悪くなり、介護はとても切実な問題に感じるようになった。それで、前回の懇話会でお寺ができる介護についての提言をさせてもらった。それが今回のテーマとして取り上げられた。

介護というのは近年の大きな問題になっており、これから解決していかなければならない問題だと思う。介護に関しては、介護する人材、施設、費用すべてが足りず、今後さらに足りなくなるだろうと言われている。そうした場合、行政、あるいはボランティアなどがこの問題に取り組んではいるが、はたして、そうしたものだけに頼っていてよいものかということが現代の問題としてあると思う。

この場合、まさに浄土宗で言っている「ともいき」が、支えあい、助け合いというもので重要になってくると思う。お寺はもともと地域コミュニティの核のひとつだと思っているが、その中核として、「ともいき」の精神を活かしながら、介護の問題にも取り組んでいただきたい。

もちろん、お寺のやるべきことは、信仰の培養や儀式、そして心の問題などいろいろ

あるが、これらには僧侶と人々との語り合いの場が大切だと思う。すでにそういった試みをされているお寺さんもいっぱいあると思うが、それを現実の介護の問題にも広げてほしい。

具体的に言うと、お寺さんがそういった施設を経営するというのもあると思うが、それよりはそこに集った人たちがお互いに助け合う「ともいき」の精神を支えあうような仕組みが作れないか、と。たとえば「見回り」、あるいは独居老人に対する「声かけ」のようなことを、お寺の中で縁を作った人々が協力しあって出来ないかと思う。そうは言っても、それをお寺の中の組織だけで行うのは難しいと思うので、地域の社会福祉協議会やボランティア、あるいは行政も含めて、お寺を中心として地域一体となるような仕組みを作って、申し上げたようなごく簡単な介護などから行っていけないかと考えている。

現在、行政のほうでも地域の包括ケアシステムを行っていかうという話があり、これはまさに医療や介護などを地域のボランティアやNPOと一体化してやっていくことになっていて、ここにお寺さんも入ってってもらえないかというのが私の意見。

お寺さんが入る意味というのは、単なるボランティアではなく、仏教の慈悲の精神など、そういったものが必ずにじみ出ると思う。ボランティアやNPOの方々にも使命感などがあって、それも立派なものだと思うが、そこにお寺さんが入って心の部分、魂の部分をこめられないかと。

お寺がケアシステムの中のひとつとして活動していく中で、仏教の慈悲などの精神とか心の問題を語っていくことができれば、さらに地域の「ともいき」の精神を持ったコミュニティというのは発展していくのではないかと考えている。

去年のベストセラー『下流老人』という生活困窮高齢者を支援しているNPO代表の藤田さんが書いた本が、とくに強調していたのが「関係性」や「つながり」で、これはまさに浄土宗で言う「ともいきの心」であると思っている。

高齢者が増えていく中で、老老介護など問題はさらに深刻化していくと思うが、その中でお寺を核として、地域で高齢者を支えるシステムを作り、力を発揮してほしい。お寺としてはその地域への働きかけ、教団としては、場合によっては政治に対して介護についての発言などをしていただきたいと思っている。

0 師 総合研究所ではいろいろな調査研究を行っている。かつて、私たち僧侶が葬儀をする時に、亡くなられた方の思いや、ご家族の思いをどれほど受けて活動しているのかという調査を行った。

介護や看護を受け入れている方が最期を迎えるときに、国のほうはなるべく在宅を勧めている。国民のアンケートでも80から85%の方が家で最期をと答えているが、そのうちの6割の方が実際には難しいと答えている。その一番の理由は、家族に迷惑や手間

をかけるからと。この思いは非常に強い。私たち僧侶はこのような辛さや思いにどれだけ寄り添えるかということが課題だと思うが、おそらく当事者にならないと分かりにくいことだとも思われる。

いま、こうした現場では、これを医療従事者の方が受けている。ちょっと映像をご覧ください。

(病気になり夫に介護、看護してもらっている高齢女性を診ている医師の映像が流れる。介護・看護を受けている女性は、夫に迷惑をかけたくないと、自殺を考えていることを医師に話す)

われわれ僧侶がこういった所に立会い、苦しみを投げかけられても、家族の思いや関係性がわかっていなければ答えられないでしょう。これは恥ずかしい調査結果だが、僧侶と檀信徒に葬儀に対して同じ質問をしたところ、僧侶の20%近くはご遺族の心の慰めになっていると思っているが、檀信徒でそう感じている人は1%しかいない。僧侶は一生懸命お勤めしていても、実際は心に響いていないというのが現状。こうした状況に、研究所でも、具体的に私たちがどう関わっていけばいいのか、皆様からもご意見をいただきたい。

A氏　　まさに、いま映像で見せてもらったことは人ごとではないなと思い、そしてこれが現実だと思った。

最近、辻原登という作家の『冬の旅』という本を読んだが、その中に、刑務所に殺人罪で入っている男が、かつて順調な生活をしていた中で、奥さんが脳梗塞を患い、その看護をするようになり、その疲れから無理心中をはかった。奥さんは亡くなり自分だけが生き残り、殺人罪で刑務所に入り、宗教的な人間になっていくという話だが、いま見た映像と同じだと思った。

介護や緩和ケアの問題は、ひところは病気を治すのが病院で、緩和ケアをするのは病院ではないと思われていた。私の後輩の医師など緩和ケアを行っている人は異端とされていた。しかし、最近はそれも病院のひとつの機能として定着してきてはいるものの、まだまだ一部でという状態ではないかと思う。

しかし、これから先はそういったことはますます深刻化していくと思うので、いろいろ手を打たなければならないと思う。また、宗教家として、直接介護や緩和ケアを受けている人に向き合うこともあるでしょうから、この問題に取り組んでいくことは非常に大事なことだと思う。

ただ問題は、介護を求めるような人たちにお寺に来てもらいたいものの、動けなくなってからでは無理。また、一般的にお寺というと葬式をイメージされてしまうと思う。むしろ、介護を受けるようになる前からお寺に集まり、皆がコミュニケーションできる場を作ることが大事ではないか。元気なときからお寺で活動し、人と話すだけでも大事なことで、それがDさんから話題に上がっているような「見回りや支え合い」につな

がってくるのではないか。

たとえば写経や読書会などを行うなどして、お説教などという宗教を強く感じさせるものではなく、日常生活の中で心の支えになるようなことをしてみるなど、そういった入口を工夫することが大事だと思う。

私が大阪の新聞社に勤めていたころ、定年後の人たちを集めてボランティア活動を行うクラブを作ってはどうかと提案して進めたことがある。はじめは反対者も多く、1万人も集まるかと心配したが、今では6万人を超えている。何か役に立ちたい、経験を生かしたいと思う人はたくさんいる。

もともと「ともいき財団」が行っている活動を活かして、お寺を人々が集まり支え合えるコミュニケーションの場として機能するようにはしていただきたいと期待している。

C氏 ファイナンシャルプランナーである知人は、「お寺の門を開く前に、お坊さんはまず心の扉を開き、目を開いて、社会が寺や僧侶に何を求めているかを謙虚に注意深く見極めるべきだ」と言っている。これに尽くされると思う。

経済で言えば、葬儀の値段を明確にするということ。全日本仏教会から仏敵と言われたイオングループが何をしているかといえば、地域ごとにそのニーズを調べ、地域独特の商品を作っている。商業の論理としては当たり前のことだが、社会のニーズを必死に探り、それに応えようとしている。

超高齢化した現代社会は、地方でも都会でも、若者においても高齢者においてもお一人さまが増えていて、これが標準になってきている。それが孤独死や介護問題にもつながっていると思う。このように家族形態が崩壊している現代において、お寺の社会は昔ながらの家族という単位を想定した檀家制度に基本をおいている。これにはかなり無理があり、見直す必要があると思う。お寺は、失われた家族の結びつきを再形成、再構築するような活動が必要であり、家族でなくても、それに変わる関係性を修復し直すような活動が求められていると思う。それは仏教で言う「縁起」というものにぴったり重なりと私は思う。

具体的には、お坊さんは人の生と死に関わる活動が根本であると思う。都市部では直葬が3割になり、その場合、仏教者の出番はなく、あってもお坊さんの宅配便のようなことが起っている。しかしそれが広まったのは市民社会に何らかのニーズがあるからで、アマゾンの「お坊さん便」も菩提寺と付き合いがある人は利用できないとなっているため、これを受けてお坊さんもしっかりしなくてはならないし、そういった市民感情を知ることが大事だと思う。

これに対して、宗教学者の中村圭志さんは、この「お坊さん便」がメディアで、仏教界がしっかりしていないからだとして批評されることで、仏教界が企業努力をしていないと勘違いされ、仏事がビジネスの論理として捉えられること自体に問題の本質があると言っていた。しかし、宗教の与えるという行為——布施——が、商取引のようであってはいけないということが一般の人にどれだけわかってもらえるか。また、商行為を超えて与

えるということが、個人的な葬式という場に適應される理由を説明できるのか。

もちろん寺院と地域社会の結びつきが非常に強いところもまだある。たとえば東日本大震災被災地では、犠牲者を弔うのにボランティアで東京から来たお坊さんではなく、うちの和尚さんにお経を読んでほしいと言っていた方も多くいた。それは、死んでいきなりではなく、生きている間からの長い付き合いがあったからだと思う。

これから言えることは、死という大事な場面に宗教者が関わるためには、生きているときからしっかりとした関係性を築く必要があるということ。地域の人々は、悩み事を抱えながら、相談できる人を求めている。それにいかに応えていくかということ。具体的には、エンディングブームを受けて勉強会や集まって話す会を設けるなどだが、住職自身がすることが難しいのならば、医療福祉関係の人とネットワークを作って、お寺がコーディネートをして行うこともあり得る。あるいは、法類や教区で自分の得意分野をお坊さんが持ちよって複数でやれば何か面白いことができるかもしれない。現にやっているところも知っている。お寺は地域の中でひとつの場として力を発揮できる資源であるから、知恵を出し合ってネットワークを構築し、生きているときから介護から終末医療のことまで勉強するようなことをやっていけばよいのではないかと思う。

たとえばお寺でグループホームをやって成功している本願寺派のお寺や、在宅ホスピスで走り回っていて非常に信頼を得ている尼僧さんなど、やり方はいくらでもあると思う。

E氏 首都圏で介護をどうするかという問題を直視した場合に、誰が介護するかという人手がいることになる。そうすると、今の状況から言うと外国人を介護の人手の主役に考えざるをえないのではないか。ところが日本の場合、外国人の受け入れはなかなか難しい。それをこのまま放っておいていいのか。

最近、フランスで、宗教的空白と格差の拡大が外国人の排斥にもつながっているという本も出ているが、日本においてそれはどうなのか。介護の問題を考える上で、外国人であることと宗教の違いを超えて介護に協力してもらうことも考えざるをえないのではないか。逆に言うと、今の宗教者が外国人を排斥することがないような日本の社会環境づくりを考えることも大事ではないかと思う。

先ほどの映像でもあったが、結局お父さんに迷惑はかけられない、面倒は見られたくないなどあるが、こういった感覚は誰が作ったのか。本来、日本社会では、世の中は迷惑をかけかけられ、支え合っていくことで出来あがっていたと思う。ここで宗教者はそういうことは当たり前のことなのだということをきちっと伝えて、病気になれば支えられる、病気の人がいたら支えるのが当たり前といったことが、今の社会を作っていく上で必要なのではないか。

それから具体的に地域の取り組みで言うと2つあると思っている。

ひとつは長屋の思想のような、ある種の共同体のようなものが必要だということ。若い人も母子家庭の人も高齢者の人もお互いにメリットを共有できるような場作りが大切

であると思う。

もうひとつは、横浜市で在宅医療連携拠点を去年から打ち出している。それは、2017年までに18の区で拠点を置いて、その中にケアマネージャーなどを置いてやるということだが、この中に宗教者が入ってもよいのではないかと思う。活動はあくまで医療面の話になるが、メンタルの問題が大きなテーマになってくるとも考えると、その中に入って行って布教活動とは別に心の支えというのを打ち出す。こういうことは医療だけの問題ではないと思うので、そういうところにも積極的に関わっていただければと思っている。

F氏 母親を約1年前に亡くした。最後は介護の施設や介護保険に入るなどしたので、それに関わっていた経験から断絶ということについて話したい。

父と母は大正末に生まれ、若いころに東京に出て来たからか、田舎や両親のことを懐かしんでいた。また非常に仏教が盛んな土地で、お祭りを含めた風習というのも思い出すという。しかし、懐かしむ理由として、宗教的な習慣・習俗など長い伝統のなかで育まれた、自分の育ちや先祖を懐かしむようなものがあるはずだと思った。そこが断絶されていて、私たちは、ただそれを古い風習だ、昔の人のことだと考えてしまうようなところがあるのではないかと。そこで問題になってくるのは、どのような背景を持って父や母は育ってきたかということについての理解が我々には届いていないのではないかと思う。

もうひとつ言うと、私が介護施設の方とコミュニケーションをとるなかで感じたことは、介護施設では資格を持った方たちが専門の立場から介護のためのいろいろな運動や発声の練習、唱歌などを行っているが、そこにも私はある種の断絶を感じた。そういうことが大切なことは分かるが、介護をする人たちに、介護される側の育ってきた背景や、心の中に何を抱えているかなどは、なかなか理解できないのではないかと思う。介護される人の地域ではどのような先祖の見送り方をして、どのような風習を持って親や先祖を思うことがどれだけ重要なことであったか、それについてどんな歴史があったのかなどを優しい言葉で伝えることができないのかと思う。こうしたことが介護をされる人にとってどれだけ心の安らぎに繋がるか、とても大切なことだと思う。

それを具現化することができるのは宗教に携わっている方々ではないか。介護を受ける人の菩提寺の住職が、介護施設の職員に、その人がどういう背景を持って生きてきて、それがその人にとってどんなに大切なものであるのかを、伝えることができるのではないか。それを行うことが断絶を埋めることにつながってくるのではないかと思っている。

G氏 介護は、私にとっても切実な問題です。現在、母が認知症で、父はがんに。このため仕事の部署を変えてもらうという、まさに介護は人ごとではありません。

しかし、介護というのは、この状態がいつまでも続くことではない、ということだと思う。端的に言えば、冷たく聞こえがちだが、いずれ父も母も死ぬということ。すべて

のものは変わっていき、終わりがあると。がんである父に、あと数年の寿命だから、今をどう生きていけばいいのかと話すこともあるが、私が言うとなんか冷たく感じ、また言いたくもない。こういうことは仏教者なり宗教者が語りかけることによって、医療従事者が語るのとも違ったように聞こえてくるのではないかと思う。

ただ、現実問題として、そういうことをしていただける僧侶は少ない。これはご住職が、檀家さんがそういう病に罹っていることを知らないとか、私たち檀家をご住職にお願いしないこともあるかも知れないが、ともかく、知っていてもなかなか僧侶がそういったことについて応えてはいないと思う。

父は、自分が死んだらこんな葬儀にしてほしいと、葬儀の費用を渡してくるなど、子どもに対して経済的な心配はしていても、心のケアというところについてはなかなか思いがいたっていないと感じる。これは宗教者が悪いというのではなく、私たちマスコミを含めて世間の考え方がお金のほうにしか向いていないのではないかと思う。

あともうひとつ、先ほど出た話の中で、首都圏の介護難民という問題が出てきて、今後地方にお年寄りを受け入れてもらうという話があったが、それによって地方で雇用や経済活動が生まれる可能性を秘めていると思う。とはいえ知らない土地に行くことに抵抗はあると思うが、お寺を人々の集まれる場所として使えるあり方は大切だと思う。お寺を会所として新参者と元からの人々を会わせる。僧侶自身が問題を解決するのではなく、自分たちが紹介役のようになり、そういった活動をしているボランティアなどの団体をつなげていくという活動が大きな広がりを見せていると聞いたことがある。それと同じようなことが介護の世界にも可能性としてあるのではないかと思う。

それともうひとつ、先ほど見せていただいた映像の医師もクリスチャンということで、お医者さんが宗教を信仰するということも受け入れられてきているような動きもあるので、そういったところで接点をつくっていくことも大切だと思っている。

Y 氏 皆様ありがとうございました。介護のことを我がこととして話ししていただけたことは胸に響きました。

90年代だったと思いますが、国から後期高齢者ということが言い出されて、それに続いて要介護高齢者のことが制度化され、この制度化とともに医療・介護・年金・保険等々、財政的な問題がおこり、それらが結びつくことによって色々な難しい問題が発生してきました。その一方で、医学の世界では、新しい技術が次々に生まれ、それによって延命化を図ることが主流になり、それに対する反省もいま出てきた。

そういったなかで、宗教者として、宗教教団としてもっとも大事に関わるべきことは、その先の末期高齢者、臨終期高齢者についてどう関わっていくべきかだと思う。これには社会もメディアも政治も行政も正面から考えるには問題が大きすぎる。ここはやはり宗教ではないか。ここが人・物・金という物的関与から心の関与への転換の重要な分岐点だと思う。教団が末期、臨終期、死、葬儀にいたる過程をつなぐようなモデルを出していくべきだと。コミュニティや家族との関係性、一般社会から宗教者に対する理解の

なさ、これは断絶にもつながるが、関係性と断絶の2つの問題を宗教がどう解決していくべきか、それが大きな問題であると考えている。

そう考えたとき、これは言うのがとても辛い、現代の日本社会や世界の状況の中で、法然さまや親鸞さまの人格や生き方は、おそらくもうモデルにならないかもしれない。なぜかという、二人のようなカリスマは自立した人間として死を覚悟し、その彼方に浄土を見、そのために念仏をとる。一貫している。自立した人間だ。そうした自立した人間が、近代というか現代という時代の波に洗われて存在し得なくなっている。浄土も信じることができない。浄土の存在を信ずる者は、ほとんどいない。仏教者といえども少ないのではないか。お二人のような自立した宗教者を、現代において師表とすることは難しいと思う。

では誰がと言うと、源信ではないかと。『往生要集』では、まさに弱い人たちが週1回集まって二十五三昧会（*）という死のための団体を形成していた。臨終を迎えた同志のために念仏をとる、24時間の看護体制で2人ずつ交代して最期まで面倒を見る。これがいま一番必要とされているのではないかと。時代を逆行するようになるが、これまでは源信から法然、法然から親鸞と流れているように捉えられているが、現代社会の膠着は、源信の時代の社会情勢に非常によく似ている。

今日、この臨終に向かう人々を看取るのは二十五三昧会ではないか。二十五三昧会のような体制をつくり、死に行く人をどう往生に向かわせるか、それを現代社会のなかでどうモデル化できるかを考えることは、どの地域においてもできることではないかもしれないが、出来ないことではない。仏教教団がやるべきことだと思っている。始めは小さな集団で行い、それがモデルとなって広がっていく。

法然さまや親鸞さまの生き方を現代人に要求するのは辛いことだという気がする。仏教全体に対する考え方を根本的に見直していく必要があると思う。二十五三昧会の臨終行儀の教えは含蓄があると思う。世界で始めて看取りから死の問題へと一貫して関わっていくシステムと考えられ、仏教教団としては根源的な問題だと考えている。

後期高齢者、末期高齢者、臨終期高齢者、そして葬儀の4段階を現代社会に当てはめて考え直していけば、必ずモデルが作れるのではないかと考えた。特に法然上人のお念仏の教えを受け継いでいる浄土宗は、法然上人になることはできないが、二十五三昧会のような組織を各寺院が協力して組織し、現代の介護問題に立ち向かっていただきたい。

（*二十五三昧会 比叡山横川の僧25名を根本結衆として始められた念仏結社。会衆は『観無量寿経』の文を来世の証として互いに善友となって臨終まで念仏行を支え合うことを誓い、またこの念仏を六道に輪廻する一切の衆生に回向して、共に浄土に往生することを願い、毎月15日に不断念仏として修した）

この懇話会の後、A氏から下記の発言がありました。

「今日は、介護そして人間の死という非常に重いテーマで、私も発言をいたしました。皆さまからのご発言を聞いていて、私自身も非常に感じる事が多く勉強させていただきました。こういう勉強をさせていただく機会は少なく、世の中どこへ行っても明るく楽しいという空気をつくらないと居心地が悪いという風潮があります。しかし、この懇話会で、我々が抱えている問題を正面から取り組んで考えることの大切さを示していただき、こういう場を提供してもらえることに感謝しております。

今回の懇話会では、介護がテーマでしたが、明るく楽しく豊かで快適にという近年の風潮が、今日の社会状況を生んできていると思います。これはけして高齢社会だけの問題ではなく、子どもの世界のなかでも、親子や子ども同士で残虐なことがおきています。やはり授かった命の大切さを苦しみながらも喜びを持って生きるということが、いまの日本の社会から薄れてきていると思います。

浄土宗の方がそういった問題に真剣に取り組む、そしてお寺をそういったことに取り組む場として提供することを具体的にやっていただければありがたいと思います」

以上